

日本ワイルド協会 第 36 回大会

(於 東京女子大学, 2011-12-10)

シンポジウム要旨

シンポジウム (15:20-17:50)

「ワイルドと世紀末ロンドンの諸相」

ケルムスコット・ハウスのワイルド——緒言

司会・講師 日本女子大学教授 川端康雄

バーナード・ショーの回想によると、ウィリアム・モリスは「ゆっくり死に向かっていたとき、他の誰よりもワイルドの訪問を喜んだ」のだという。両者に面識があったのは確かだが、ワイルドがモリス宅（ロンドン、ハマスミスのケルムスコット・ハウス）を「最晩年」に訪れたという根拠は乏しい。しかしこの憶測はモリスとワイルドの思想的関係を考察する糸口になる。1880年代から90年代にかけてケルムスコット・ハウスは政治と芸術双方の前衛運動の一大拠点であった。ロンドン西郊のこの家を中心的なトポスにして本シンポジウムの緒言としたい。

喧噪のあとさき——ワイルドと 1890 年代の出版業界

講師 ロンドン大学キングズ・コレッジ博士課程 庄子ひとみ

ワイルドは、大量印刷物が世論を大きく左右する時代の動向を敏感に察知し、積極的に自己宣伝の場としてそれらを利用し成功しながら、苛烈な反作用に翻弄され失墜した作家でもあった。大衆の反応を時にスキャンダラスに煽るマスメディアと作家、読者の構造を理解しようとする際、出版業界の最前列で話題を提供し続けたワイルドと同様、その背後で舵取りを担った個性的な出版者達の存在は無視できない。ワイルドの人生の転換点における出版業界との関わりに注目し考察する。

ワイルドと舞踊芸術

講師 和歌山大学准教授

桐山恵子

19世紀英国バレエの全盛期は、ロマン主義勃興にともなう1830～40年代のロマンティックバレエの時期とされ、それ以降の舞踊が、批評の場で表立って論じられることは少ない。そこで今回の発表では、これまで見過ごされがちだった、ワイルドが活躍した世紀末のバレエに着目し、ワイルド作品と舞踊とのかかわりを考察する。さらにバレエの概念を一変させたディアギレフに、ワイルドが与えた影響も探してみたい。

ワイルドとイギリス「近代」芸術のポリティックス

講師 成城大学非常勤講師

田中裕介

本発表では、ワイルドの芸術認識を、modern という語が大きな意味を帯びていた同時代ロンドンの美術をめぐる言説の場に置き直して再検討する。ワイルド、そしてホイッスラーの「卑俗」(vulgarity)と「俗物」(philistine)に対する感性に注目することで、ワイルドをモダニズム美学の先駆者として評価する見取り図を相対化したい。さらに英国美術ギャラリー（現テイト・ブリテン）設立（1897）にいたる美術制度変革の流れの中でワイルドの美術観がどのように位置づけられるのかを考察する。